

呉趼人と保皇会の関係についての考察

——『采風報』をめぐって——

施 冰 媛

1. はじめに

呉趼人は清末における著名な小説家の一人であり、「譴責小説」の代表作として広く知られる『二十年目睹之怪現狀』によってその名を高めた。

呉趼人は1866年に北京で生まれ、翌年に両親と共に故郷である広東省南海県に帰り、そこで成長した。1882年に上海に赴き、江南製造局に勤務した。その後、1897年に『字林滬報』の編集に携わったことを契機として、『采風報』、『奇新報』、『寓言報』、『漢口日報』など複数の新聞において主筆を務めた。1904年には、梁啓超⁽¹⁾が1902年に創刊した雑誌『新小説』の編集長に就任し、本格的に小説創作を開始、自身も積極的に創作活動を行うようになる⁽²⁾。小説家としての呉趼人の位置づけを考察する上で、『新小説』編集長への就任は重要な転機であるが、当時亡命中であった梁啓超から編集職を引き継いだ具体的な経緯や、両者の関係性については未解明な点が多い。

先行研究において、呉趼人と梁啓超をはじめとする維新派との関係について、いくつかの指摘がなされている。黄霖「呉趼人的小説論」⁽³⁾、張純「新見呉趼人『政治維新要言』及其它」⁽⁴⁾などの研究は呉趼人が維新派の思想を持っていたことを指摘している。しかし、両者の関係は思想的立場が近いことに止まらないだろう。『新小説』の編集が梁啓超から呉趼人に委託されたことを考えると、両者の間には『新小説』編集長交代以前から交流があったはずだが、呉趼人と梁啓超ら維新派との実際の交流については先行研究が少なく、更なる研究の余地が残されている。夏曉虹は、呉趼人と梁啓超が1904年初頭に面会しており、両者の間には親密な関係が存在したと指

(1) 清末民初の政治家。字は卓如、号は飲冰室主人など。1873年、広東省新会県に生まれる。1898年に康有為と共に戊戌の変法を主導したが、同年9月の戊戌の政変により日本に亡命した。『清議報』、『新民叢報』、『新小説』などを創刊し、立憲君主制および維新改革の理念を積極的に鼓吹し、革命派とも一定の交流を持っていた。1917年に政界から引退、以後は文化・教育事業に専念した。1929年に死去。

(2) 呉趼人が1904年に『新小説』を引き継ぐ時期については、陳大康「『新小説』出版時間辨」(『華東師範大学学报(哲学社会科学版)』第2号、2009年3月)、姜栄剛「『新小説』印刷地点及出版日期考辨」(『瀋陽師範大学学报(社会科学版)』第2号、2009年3月)を参照。

(3) 黄霖「呉趼人的小説論」(『明清小説研究』第1号、1986年4月)を参照。

(4) 張純「新見呉趼人『政治維新要言』及其它」(『文献』第3号、1989年第10月)を参照。

摘している⁽⁵⁾。さらに松田郁子も、吳趸人と梁啓超が共に広東出身であり、同じく仏山書院に学び、汪康年⁽⁶⁾をはじめとする多くの共通の友人を有していたことから、両者の関係が密接であったとする⁽⁷⁾。しかしながら、吳趸人と梁啓超ら維新派との間で、具体的にいつ、どのようにやり取りが始まったのか、どのような関係であったのかという点については、いまだ明らかになっていない。

吳趸人の経歴研究全体を見ても、この点に関する説明はなされていない。主な経歴研究として、魯迅『中国小説史略』⁽⁸⁾、中島利郎「吳趸人伝略稿」⁽⁹⁾、魏紹昌「魯迅之吳沃堯箋注」⁽¹⁰⁾などがある。これらの研究は、吳趸人の主要な筆名による著作やその家系、おおよその生涯の事績について明らかにしているが、吳趸人と康有為⁽¹¹⁾や梁啓超らとの交遊については触れられていない。1980年代の研究においては、『新小説』を引き継ぐ以前の経歴について、吳趸人の経歴の細部がさらに明らかにされた。例えば、葉易「吳趸人到上海年分考」⁽¹²⁾、王立興「吳趸人与『漢口日報』」⁽¹³⁾、王俊年「吳趸人年譜」⁽¹⁴⁾、樽本照雄「李伯元と吳趸人の経済特科」⁽¹⁵⁾において、吳趸人が上海に来た時期、『漢口日報』を辞職した経緯、経済特科を辞める時期などの問題が議論された。近年の研究では、吳趸人の生涯に関して、未発見作品の紹介、使用された筆名や家系に関する考証、およびそれらの訂正作業に焦点が当てられている⁽¹⁶⁾。しかしながら、前述の夏暁虹や松田郁子を除けば、吳趸人が維新派といかなる関係を有していたかについて論じた研究は見られない。

これは主に資料の不足によるものである。吳趸人が遺した一次資料は非常に少なく、本人の自述や親友の回想録に頼らざるを得ない。清末の新聞にも吳趸人に関する記事が散見されるが、そ

-
- (5) 夏暁虹「吳趸人与梁啓超関係鉤沈」(『安徽師範大学学报(人文社会版)』第6号、2002年11月)を参照。
 - (6) 清末のジャーナリスト・政治家。字は穰青、号は毅伯など。1860年に浙江省錢塘県に生まれる。1890年に張之洞の幕僚として仕え、1896年に梁啓超らと共に変法を主張、変法運動に参加。戊戌の政変後は『中外日報』を主宰、『京報』や『昌言報』を創刊、これらの新聞を通じて政治的主張を展開した。1911年死去。
 - (7) 松田郁子『吳趸人小論「譴責」を超えて』(汲古書院、2017年)第8章を参照。
 - (8) 魯迅『中国小説史略』(北新書局、1925年)第28章を参照。
 - (9) 中島利郎「吳趸人伝略稿」(『清末小説研究』第1号、1977年10月)を参照。
 - (10) 魏紹昌「魯迅之吳沃堯箋注」(魏紹昌『吳趸人研究資料』上海古籍出版社、1980年)第2-9頁を参照。
 - (11) 清末の政治家・学者。字は広厦、号は南海老人。1858年、広東省南海県に生まれる。1895年に「公車上書」を發起、1898年6月の戊戌の変法では変法運動の指導者となった。戊戌の政変後は海外に亡命した。亡命中に「保皇会」を組織、立憲君主制および変法維新の主張を唱え、革命派と激しい論争を繰り広げた。中華民国の成立後も一貫して清朝の復辟を主張し、民国体制に反対の立場を取った。1927年に死去。
 - (12) 葉易「吳趸人到上海年分考」(『復旦学报(社会科学版)』第3号、1983年3月)を参照。
 - (13) 王立興「吳趸人与『漢口日報』」(『明清小説研究』第3号、1989年10月)を参照。
 - (14) 王俊年「吳趸人年譜」(『中国近代文学研究』第3号、1985年12月)を参照。
 - (15) 樽本照雄「李伯元と吳趸人の経済特科」(中国文芸研究会『太田進先生退休記念中国文学論集』、1995年)を参照。
 - (16) 例えば、裴効維「吳趸人家世考略」(『明清小説研究』第3号、1998年9月)、李峰「『吳趸人致商会函』小議」(『歴史檔案』第3号、2003年9月)、何宏玲「最新発見的吳趸人佚文」(『明清小説研究』第1号、2006年3月)などがある。

これらの多くは吳趼人が有名になった後の重要な活動や著作に焦点を当てている。『新小説』を引き継ぐ以前の事績については、吳趼人本人の断片的な記述や親友の回想録に残されたわずかな内容を除けば、ほとんど知られておらず、学界の研究も十分とは言えない。

本稿では、上海で発行されていた新聞『采風報』に着目し、戊戌の政変以降、海外に亡命せざるを得なくなった梁啓超ら維新派の政治活動、いわゆる保皇会の活動に、吳趼人も関与していた可能性が高いことを論じていく。本論は4つの部分に分かれている。第2節は保皇会の活動について、『清議報』や『知新報』などの機関紙を取り巻くネットワークを中心に整理する。第3節では、吳趼人が『采風報』で主筆を務めた時期について検討する。第4節では、『采風報』が『清議報』の代理販売所であった時期を検証し、吳趼人が在職していた時期と重なることを指摘する。さらにその代理販売が『清議報』、ひいては保皇会にとってどのような意義を持っていたのかを分析する。第5節では、吳趼人が主筆を務めていた時期に『知新報』が『采風報』の記事を転載していた事実を確認した上で、それらの記事の特徴を分析する。あわせて清国内で政治活動が制限されていた保皇会にとって、記事の転載がどのような意義を持っていたのかを考察する。以上の論述を通じて、『采風報』の主筆であった吳趼人と保皇会の関係について考察を試みる。

2. 保皇会の設立とそのネットワーク

1898年9月、戊戌の政変で弾圧された康有為と梁啓超はイギリスと日本の保護のもと、北京を脱出し、相次いで日本に到着した。まもなく清朝政府は日本政府と協定を結び、康有為は日本から追放されることになったが、梁啓超は長期滞在を許された。そのため、梁啓超は主に横浜に滞在し、康有為は東南アジアやアメリカ大陸などを転々としながら亡命生活を続けた。

康有為らは当初、幽閉された光緒帝を救出するため、外国からの援助を得ようと各国政府に接触を試みた。しかし、どの国の政府からも援助を得られず、1899年7月20日、康有為は海外華人からの支持を背景に、カナダで新たに保皇会を設立した⁽¹⁷⁾。設立の目的は光緒帝を救出し、維新派の復権をはかることであった。その後、康有為や梁啓超らは多くの華人が住むシンガポール、マカオ、横浜、ビクトリア、サンフランシスコ、ホノルル、シドニーといった世界各地に次々と保皇会の組織を設立し、維新派の支持基盤を築いていった⁽¹⁸⁾。とりわけ創設初期の香港・マカオ保皇会や横浜保皇会、さらに帝国憲政会へ改組された後のアメリカ保皇会などが、比較的重要な役割を果たした。これらの保皇会の組織は会員の勧誘や会費の徴収を行うだけでなく、1900年初頭の己亥の建儲や1900年夏秋の庚子勤王蜂起など、清末期における一連の重要な政治活動を組織した。保皇会は1907年に帝国憲政会へ改組、翌1908年には光緒帝が崩御し、これによって保皇

(17) 保皇会の成立過程について、張玉法『清季の立憲団体』（中央研究院近代史研究所、1985年）第5章を参照。

(18) 張玉法『清季の立憲団体』（中央研究院近代史研究所、1985年）第5章を参照。

会設立当初の目的も失われることになった。

戊戌の政変後、康有為など維新派の主要なメンバーは海外に亡命し、清国内での政治活動は厳しく制限された。しかし、それにも拘わらず、保皇会は世界各地で華人社会との結びつきを強め、さらには新聞などのメディアを利用して国際的なネットワークを形成し、清末政治において一定の存在感を示し続けた。

保皇会が組織した諸活動は、保皇会の各拠点で刊行された機関紙などを通じて、清国内や世界各地の華人社会に向けて広く発信された⁽¹⁹⁾。例えば『知新報』や『清議報』などの機関紙は海外にも多くの代理販売所があり、その多くは華人の協力者や華人が経営する新聞社などであった。また、これらの保皇会の機関紙には清国内や海外の新聞、各地の華人が刊行する新聞などから多くの記事が転載された以外に、華人から寄せられた多種多様な投書なども掲載された⁽²⁰⁾。逆に保皇会機関紙の記事が各地の華人経営の新聞に掲載されることも少なくなかった。これによって、華人および各地の華人社会にとっては、保皇会が擁する国際的なメディアネットワークを通じて自らの声を広く発信し、遠く離れた地域に住む華人同士が互いに情報を共有することが可能になった⁽²¹⁾。他方、保皇会にとっても自らの機関紙や協力関係にある華人社会の新聞などを通じて、維新派の政治思想や政治課題、保皇会の取り組みを世界各地の華人社会に伝え、支持基盤を広げることになった。

周知の通り、康有為や梁啓超などの維新派は以前から新聞事業に積極的に取り組んでおり、戊戌の変法時期には上海の『時務報』をはじめとして、香港・マカオでも新聞が創刊された⁽²²⁾。戊戌の政変後、清国内で刊行していた新聞は政治的に弾圧され、ほぼ壊滅状態に陥ったが、香港・マカオには維新派と密接な関係を持つ新聞が依然として存在していた。例えば、香港・マカオ保皇会機関紙である『知新報』は元々、1897年2月22日、康有為らによって創刊された。発行地がマカオであったため、戊戌の政変後も廃刊を免れ、香港・マカオ保皇会の機関誌という位置づけを得て存続することとなった⁽²³⁾。『知新報』の運営は何廷光⁽²⁴⁾や徐勤⁽²⁵⁾など、保皇会の中でも康有為に近い関係者で占められていた。他にも、維新派が直接刊行していたわけではないが、以

(19) 李海蓉「保皇会在澳洲的興起—基於『東華新報』的媒体傳播理論与量化分析」(『華僑華人歴史研究』第2号、2015年6月)、李海濤「『天南新報』研究」(東北師範大学博士論文、2017年)などを参照。

(20) 呉憲占「『清議報』に見る清末の華僑社会:改良派の海外活動との関連から」(『アジア社会文化研究』第22号、2021年3月)を参照。

(21) 呉憲占「『清議報』に見る清末の華僑社会:改良派の海外活動との関連から」(『アジア社会文化研究』第22号、2021年3月)を参照。

(22) 深澤秀男「戊戌変法期における学会、報刊、学堂についての研究」(求是舎、2007年)、丁淦林「戊戌政変後の改良派的報刊」(『中国新聞事業史』武漢大学出版社、2009年)第69-77頁を参照。

(23) 盧娟「晚清澳門『知新報』研究」(暨南大学修士論文、2007年)を参照。

(24) マカオの実業家。別名は何穂田。生没年は不詳。1897年、康有為らをマカオに招き、『知新報』の創刊を支援、自らはその社長を務めた。戊戌の政変後は康有為の亡命を支援、香港・マカオ保皇会の会長に就任した。1900年に勤王計画が失敗すると、次第に保皇会との関係は疎遠になった。

前から協力関係にあり、政変後も協力関係が維持された新聞が複数あった。例えば、香港の『循環日報』や『華字日報』などは、保皇会にとって自らの立場を伝えてくれる貴重な新聞であった。清国内での政治活動を封じられた保皇会にとって、新聞などのメディアを使って宣伝、活動を行うことは、よりいっそう重要な意味を持っていたと言えるだろう。

戊戌の政変後は、世界各地に保皇会が組織され、それぞれ機関紙が創刊された。横浜保皇会の『清議報』や『新民叢報』、ホノルル保皇会の『新中国報』、シドニー保皇会の『東華新報』、サンフランシスコ保皇会の『文興日報』などが挙げられる。例えば梁啓超が横浜で創刊した『清議報』や『新民叢報』は、立憲制度の推進を強く唱え、欧米や日本の書籍や新聞雑誌などの翻訳・紹介を通じて新思想の普及に努めた。また、当時日本で活動していた革命派との間で何度か大きな論争が紙面で繰り広げられた。これらの新聞は世界各地に代理販売所を擁し、保皇会の宣伝拠点として世界中の華人読者に大きな影響力を発揮した。このように清国外では保皇会が組織され、機関紙が林立し相互にネットワークが構築されていた。

しかし、前述した通り、清国内では保皇会が表立って活動することはできなかった。当然、清国内の保皇会組織の存在を裏付ける史料はほぼなく、先行研究も乏しい。おそらく1904年に上海で保皇会所属の『時報』が創刊される以前、清国内において保皇会は明確な組織を持てなかったと思われる。保皇会は清国内に自前のメディアを持たず、第4節でも後述するが、『清議報』など海外で刊行された機関紙の販売すら禁じられ、代理販売所は清国内で出版活動をする外国の新聞社などに協力を仰ぐしかない状態であった。

ただし、維新派の立場を支持する人たちは清国内に一定数残っており、保皇会の活動に協力する人や組織がまったく存在しなかったわけではない。その一例が上海で陳範⁽²⁶⁾が主編を務めた時期の『蘇報』である。『蘇報』の政治的立場は時期によって大きく変わったが、戊戌の変法の時期から維新派による改革を支持、戊戌の政変後も依然として改革を支持する社説を發表し続けた⁽²⁷⁾。また、『蘇報』は『清議報』や『天南新報』など保皇会機関紙の記事を多数転載して、保皇会の海外での動向を報じていた⁽²⁸⁾。それと同時に、保皇会の機関紙にも『蘇報』の記事が転載されており、保皇会側が『蘇報』を協力的なメディアとしてその活動に注目していたことが窺える。保皇会寄りだった『蘇報』が清国内で刊行を続けられたのは例外的と言ってよい。おそらく

(25) 清末の政治家。字は君勉、号は雪庵。1873年、広東省三水県に生まれる。1890年に康有為に師事、1897年に『知新報』の創刊に際して主筆を務める。戊戌の政変後も康有為に従い、保皇会副会長に就任。その後しだいに清朝への失望を深めるようになり、辛亥革命後は保皇主義を放棄した。1945年死去。

(26) 清末のジャーナリスト、政治家。1860年、湖南省衡山に生まれる。1898年に戊戌の政変が始まると、改革を支持した。1898年10月、『蘇報』を引き継いで運営。1903年6月には「蘇報事件」が発生、日本へ逃亡、革命へと転向した。1913年に死去。

(27) 王敏「蘇報案前的『蘇報』及相關史事考」(『學術月刊』第1号、2024年1月)を参照。

(28) 王敏「蘇報案前的『蘇報』及相關史事考」(『學術月刊』第1号、2024年1月)を参照。

く当時は一連の中傷事件を起こして評判が悪く、影響力も小さかったため、清朝政府の注目を引かなかったためだと思われる⁽²⁹⁾。

これ以外に、天津の『国聞報』や武漢の『漢報』の例がある。嚴復⁽³⁰⁾が創刊した『国聞報』は戊戌の政変後、日本人の西村博⁽³¹⁾に売却された。1899年2月に引き継いだ西村は元の維新派の立場を維持し、『清議報』の文章を掲載し、販売にも協力した⁽³²⁾。もう一つの『漢報』は東亜同文会が発行する新聞で、海外に亡命した維新派と多くの交流を持ち、主編の宗方小太郎⁽³³⁾などが庚子の勤王蜂起の計画が策定される過程を目撃していたことが示すように、維新派と密接な関係を築いていた。『漢報』も保皇会機関紙の『知新報』と相互に記事を転載しており、両者が協力関係にあったことが見て取れる。この2紙についてはいずれも日本人が経営しているため、清国の取り締まりが及ばず、保皇会に協力できたと思われる。

つまり、保皇会の成立後、世界各地でメディアネットワークが形成された。本稿では戊戌の政変後の維新派の動きに触れるが、厳密には1899年7月に最初の保皇会が組織される以前の諸活動についても、便宜的に保皇会の活動として記述した。

3. 吳趸人と『采風報』

『吳趸人年譜』によれば、吳趸人は1898年6月に『采風報』の主筆に就任し、同紙において数年間にわたり記事の執筆や編集に携わったという⁽³⁴⁾。『采風報』は清末期の上海において刊行された「小報」の一種であり、主に各種の娯楽ニュースや社会的逸話を掲載すると共に、国内外のニュースを転載することもあった⁽³⁵⁾。『采風報』は清末の小説家および新聞人である孫玉声⁽³⁶⁾に

(29) 王敏「蘇報案前的『蘇報』」及相關史事考（『學術月刊』第1号、2024年1月）を参照。

(30) 清末の政治家。1854年、福建省侯官県に生まれる。1877年、イギリスに赴き海軍を学ぶ。1897年、『国聞報』を創刊し、維新改革を提唱した。辛亥革命後、袁世凱を支持し、袁世凱が帝位を称することに失敗した後、天津で避難生活を送った。1921年に死去。

(31) 近代のジャーナリスト。1867年、京都に生まれる。1896年に天津に渡り、1897年に『国聞報』を買収。その後、主に天津で新聞業に従事した。1930年に死去。

(32) 李浩「『国聞報』及維新輿論場域研究（1897-1900）」（安徽大学博士論文、2023年）第239頁、深澤秀男「変法運動と国聞報」（『アルテス リベラレス』第44号、1989年6月）を参照。

(33) 近代のジャーナリスト、軍事探偵。1864年、熊本県に生まれ、1884年に上海へ渡航。1896年、武漢で『漢報』を買収し、1898年には東亜同文会を發起。1923年に死去。

(34) 王俊年「吳趸人年譜」（裴効維『吳趸人全集・吳趸人研究資料彙編』北方文艺出版社、2019年）第28頁を参照。年譜が挙げた根拠は、本文で後述する吳趸人の友人である蔣紫英の証言に基づいている。

(35) 采風報館に関する詳しい状況について、湯哲聲・黄誠など『百年中国通俗文学價值評估大事記卷上』（江蘇鳳凰教育出版社、2015年）第13頁を参照。

(36) 清末の小説家、新聞人。号は海上漱石生、退醒廬主人、警夢痴仙など。1864年頃に上海に生まれ、1893年から『新聞報』、『申報』、『輿論時事報』などの各種の新聞において、編集者や主筆として活躍した。晩年には自伝的随筆『報海前塵録』を執筆し、自ら『采風報』および『笑林報』の創刊経緯を記している。代表作は長編小説『海上繁華夢』。

よって、1898年7月に創刊された⁽³⁷⁾。翌1899年に『英商采風報』と改題され、1910年頃に廃刊となったと考えられている⁽³⁸⁾。「呉趼人年譜」では旧暦と新暦が混用されており、呉趼人の主筆就任の時期を正確に確定することは困難である。仮に6月が旧暦であるとすれば、新暦では1898年7月から8月に相当する。後述するように、呉趼人は『采風報』の創刊時から参加していたわけではなく、旧暦と新暦のいずれであっても、年譜の記述には誤りがあると考えられる。

現在、『采風報』の所蔵は非常に少なく、現存しているものの多くは改題される前、孫玉声が創刊した直後の1898年後半のものが中心である。「全国報刊索引」およびハイデルベルク大学のデータベース⁽³⁹⁾によると、上海図書館に所蔵されているものは1898年7月12日発行の第3号から1900年10月29日発行の第689号までで、第1号をはじめとしてバックナンバーに多くの欠落がある。号数は基本的に第1号からの通し番号がつけられているが、例えば1899年10月27日に第277号が発行された後、11月10日に第241号が発行されるなど、番号の乱れが幾つか確認できる。現存が確認できるものは1898年が合計44号、1899年が合計8号、1900年が合計6号である。『采風報』は日刊紙であり、現在ほとんどの号が確認できない状況ということになる。

なお、改題が1899年のいつ頃行われたのか、どういう経緯で改題されたのかなど、不明な点が多い。1898年に発行された『采風報』のうち、現存する最後の号は第74号で、日付は9月21日である。采風報館の所在地は「上海英租界三馬路太平坊」となっており、これは創刊時のものと同じである⁽⁴⁰⁾。その次に残っているものは1899年2月15日発行の第25号である。この時点で采風報館はすでに「上海英租界四馬路惠福里」に移転しており、第1面には「本館告白（編集部からのお知らせ）」が掲載され、「本館自去年開辦、歲暮事繁諸多簡率、茲特改用精紙、邊幅放寬、博採新聞……後毎張收錢六文……本館採擇新聞、広徴論說（当館は昨年創刊以来、年末の多忙により諸事が簡略になっておりましたが、ここからとくに上質な紙を使用し、紙面の構成を広げ、広くニュースを収集します……今後、一枚あたり六文を頂戴いたします……当館はニュースを選択し、広く論説を募ります）」などの記述が見られる⁽⁴¹⁾。采風報館がこの時期、編集方針に何らかの変更があり、改版を行ったことが窺える。実際に第25号はそれまでの用紙より大きなサイズを使い、記事の分量も増加している⁽⁴²⁾。注目すべきはニュースや論説などの原稿募集が行われている点である。孫玉声時代の『采風報』は詩詞や筆記小説、章回小説、雑事が主な内容であった

(37) 段懷清「海上漱石生生平考」（『西学東漸與晚清語言文學』復旦大学出版社、2021年）第350頁を参照。

(38) 湯哲聲・黄誠など『百年中国通俗文学價值評估大事記卷上』（江蘇鳳凰教育出版社、2015年）第13頁を参照。

(39) 現在確認できる所蔵先は上海図書館とハイデルベルク大学の2か所のみで、後者が所蔵しているのは前者のマイクロフィルム版である。瀚堂近代報刊など、主要なデータベースや図書館の所蔵も確認したが、管見の限りでは他に所蔵が確認できない。

(40) 『采風報』第74号、1898年9月21日を参照。

(41) 『采風報』第25号、1899年2月15日を参照。

(42) ハイデルベルク大学のデータベースによる。<https://ecpo.cats.uni-heidelberg.de/ecpo/publishing-information.php?magid=223>

が、1899年以降は同紙で時事や政治に関するニュースや時評、小品文が増加する傾向が認められ、改版時に示した方向性と呼応している、と言えるだろう。なお第74号から第25号に号数が戻っている理由は不明であり、単なる誤りかもしれないが、改版などにあわせて号数がリセットされた可能性もあるだろう⁽⁴³⁾。

次に残っているのは1899年2月19日発行の第29号だが、第25号からの変化は見られる。その後の数ヶ月分のバックナンバーは欠落しており、次に確認できるのは1899年10月27日発行の第277号である。第277号には第25号と同じ住所が記載されるとともに、新聞の名称は「英商采風報」と改題されている⁽⁴⁴⁾。後述するように、1898年7月に創刊された『采風報』は、その後のどこかで編集体制が一新され、呉趼人はその新体制に参加したことが分かっている。采風報館の住所変更や改版および改題は、この編集体制の刷新と何らかの関係があると思われるが、バックナンバーの大部分が欠落していることに加え、他の資料もきわめて限られているため、確実に言えることは少ない。

呉趼人が『采風報』にいつから、どのように関わっていたかについては、呉趼人の親友の蔣紫英⁽⁴⁵⁾の証言が参考になる。蔣紫英は数年後の1906年、「先是吾友劉志沂通守、接辦上海采風報館、聘南海呉趼人先生総司筆政（それ以前に、私の友人である劉志沂⁽⁴⁶⁾氏が上海の『采風報』を引き継ぎ、南海の呉趼人氏を招聘して、紙面作り全体の総監をお務めいただいた）」⁽⁴⁷⁾と述べている。ここから、呉趼人が劉志沂に請われ、紙面作りを統括する立場、すなわち主筆として『采風報』に関わるようになったことが読み取れる。呉趼人の事情に詳しい親友が述べたことであり、信憑性が高いと思われる。加えてこの情報は呉趼人が主編を務めた雑誌『月月小説』に掲載されたものであり、呉趼人本人によって確認されていると考えられる。呉趼人が『采風報』の創刊時から参加していたわけではなかったことが分かる。『采風報』で編集以外に、経営などにも関わっていたかは不明だが、少なくとも主筆である以上、『采風報』に掲載されたすべての記事は呉趼人が確認、あるいは掲載可否の判断をしていたと考えてよいだろう。

この蔣紫英の回想、すなわち『采風報』の経営が劉志沂に移って編集体制が一新され、呉趼人が主筆に招聘されたことは、1899年の同紙の住所変更や改版および改題などとおそらく関係があるだろう。前述したように、住所変更と編集方針の変更を確認できるのが1899年2月、改題を確認できるのが1899年10月である。実際に、1899年には掲載記事の傾向に変化が見られることを考えると、おそらく1899年2月に近い時期に編集体制が移行したと考えられる。人事の打診などが

(43) ハイデルベルク大学のデータベースによる。<https://ecpo.cats.uni-heidelberg.de/ecpo/publishing-information.php?magid=223>

(44) 『采風報』第277号、1899年10月27日を参照。

(45) 清末の文人。呉趼人の死後、その詩作を編纂して詩集『趼塵詩刪剩』をまとめた。詳細な経歴は不明。

(46) 清末の文人。詳細な経歴は不明。

(47) 紫英「説小説・雑説・評新庵諧譚」（『月月小説』第5号、1907年2月）を参照。

これに先行しているとすれば、呉趺人が1898年末には主筆に就任していた可能性もあるだろう。

なお、改題が確認できる1899年10月発行の第277号について言えば、この時点で呉趺人が主筆を務めていたことはほぼ確実と言える。采風報館の住所変更や改題といった新体制への移行を窺わせる要素が確認できることに加え、呉趺人が関わったと思われる企画の記事がこの第277号に掲載されているからである。呉趺人は後年、『采風報』在任中に「花榜」、すなわち妓女の容貌などに順位をつけるコンテストを開いたことがあると回想している⁽⁴⁸⁾。第277号には妓女を推薦する投書が掲載されており、「花榜」の選考が行われていたことが窺える⁽⁴⁹⁾。一つ一つの根拠は弱いものの、複数の根拠が確認できることから、1899年10月より前の時点で、呉趺人が『采風報』の編集に関わっていたと考えられる。以上から呉趺人の主筆就任の時期はおそらく1899年初頭、幅を持たせるとしても1898年末から1899年10月以前のどこかであったのは間違いないだろう。本稿では便宜的に、主筆就任の時期を1899年と記述する。

劉志沂が1899年の新体制発足以降、経営の立場で参加していたのは確かだが、いつまで参加していたのか。これについては、少なくとも1900年初めまでは同紙の責任を負う立場にいたことが分かる資料が存在する。1900年3月に『采風報』紙に掲載された記事が『申報』の記者である章友湘を中傷したとして、劉志沂が租界の裁判所で罰せられたことを『申報』が報じており⁽⁵⁰⁾、少なくともこの時期に在職していたことが見てとれる。

呉趺人が主筆だった期間がいつまでかという点も確かなことは分からないが、1900年夏までは関わっていた可能性が高い。その根拠となるのは、『申報』の1900年8月の記事「采風宜慎」および9月の記事「采風受罰」である⁽⁵¹⁾。「采風宜慎」によれば、呉趺人は捕房（警察機関）の汚職を告発する投書を『采風報』に掲載したことにより、租界の裁判所に名誉毀損で逮捕され、罰金刑を科されたという⁽⁵²⁾。またこの記事には「將該館主筆吳蘭人拘解英美租界公堂」とあり、呉趺人がその時点で『采風報』の主筆の職位にあったことが分かる⁽⁵³⁾。またこの記事には、「吳供此稿由耀華照相館主施徳之送来、囑登於報（呉の供述によれば、この記事は耀華写真館館主の施徳之より寄稿されたものであり、掲載の依頼を受けたために新聞に掲載した）」⁽⁵⁴⁾とあり、処罰の対象となった『采風報』の記事は呉趺人が執筆したものではなかったと書かれている。当該記事を執筆していないにも拘わらず、掲載の責任を問われたということからは、主筆である呉趺人

(48) 「惟前襄『采風報』時、采風主人偶開花榜…（前に『采風報』の仕事を手伝ったとき、采風主人は偶然に「花榜」を開催しました。）」「致消閑社主函」（劉敬圻『呉趺人全集・詩・戯曲・雜文』北方文芸出版社、2019年）を参照。

(49) 「雛姫花榜薦函第二十三」（『采風報』第277号、1899年10月27日）を参照。

(50) 「訊如不訊」（『申報』第9723号、1900年5月13日）を参照。

(51) 「采風宜慎」（『申報』第9831号、1900年8月29日）、「采風受罰」（『申報』第9861号、1900年9月28日）を参照。

(52) 「采風宜慎」（『申報』第9831号、1900年8月29日）を参照。

(53) 9月の記事「采風受罰」も、呉趺人がその時点で『采風報』の主筆であるとしている。

(54) 「采風宜慎」（『申報』第9831号、1900年8月29日）を参照。

が『采風報』のすべての記事の掲載に責任を負うべきだ、と裁判所が認識していたことが窺える。つまり、呉趺人はおそらく1899年の早い時期から少なくとも1900年9月までの間、『采風報』の主筆を務めていた可能性が高いと考えられる。

4. 『采風報』と『清議報』の関係

この『采風報』は横浜保皇会機関誌の『清議報』との間に接点が見られる。1899年年末、『清議報』第33号（発行時期は旧暦光緒25年11月21日、西暦1899年12月23日）「本館各地代派處」には、采風報館が『清議報』の上海での代理販売所になるという広告が掲載されている。『清議報』が1900年11月21日発行の第69号を最後に、代理販売所に関する情報を掲載しなくなったため、『采風報』がいつまで同紙の代理販売所であったかは不明である。少なくとも第69号刊行時点までは、代理販売所を続けていたことが確認できる。采風報館は『清議報』の後継紙である『新民叢報』の代理販売所でもあった。恐らく采風報館は『清議報』が1901年12月に廃刊されるまで代理販売所を続けていたと思われる。

そもそも『清議報』の流通は、一般の新聞とは異なっていた。周知の通り、『清議報』は当時、梁啓超らが政治犯として扱われていたことから、清朝政府によって厳格な発禁措置の対象となっていた。そのため、『清議報』は創刊当初から発行や流通に深刻な困難を抱えており、清国内での販売は当時中国に滞在していた日本人、康有為と関係があるキリスト教会のネットワークなど、治外法権下にあった人びとや組織に支えられていたことが明らかになっている⁽⁵⁵⁾。例えば、1899年1月11日発行の第6号では、代理販売所として日本の商社である北京東交民巷筑紫洋行、日本の民間外交団体である同文会所属の上海『亜東時報』、イギリスのキリスト教会との関わりがある「安慶東門内道署前雙井聖公会楊先生」などの組織の名前が記載されている。これらの代理販売所は発行を担うことによって、清国内における『清議報』の読者獲得、ひいては保皇会の政治勢力拡大に重要な役割を果たしていたと言える。とりわけ1899年3月、張之洞⁽⁵⁶⁾の命によりさらに厳しい発禁措置がとられた後は、清国内の流通体制は一時崩壊状態に追い込まれ、代理販売所は10ヶ所から6ヶ所に減少した⁽⁵⁷⁾。この時期、戊戌の変法の時期に維新派の思想を持ち、康有為や梁啓超など保皇会のメンバーと交流があった汪康年や羅振玉⁽⁵⁸⁾といった新聞人たちが、禁令を承知の上で密かに『清議報』を頒布し続けていたという⁽⁵⁹⁾。それには当然、保皇会への

(55) 増田武一郎「マスメディアとしての『清議報』」（『中国文学研究』第24号、1998年12月）、阿川修三「清末新聞受容における二三の問題点」（『言語と文化』第12号、2000年3月）。

(56) 清末の政治家。字は孝達、号は香涛。1837年に貴州省貴陽で生まれる。1881年から洋務運動に携わり、1889年には湖広総督に任命され、漢陽鉄鋼所など中国の近代工業施設の設立に尽力した。戊戌の変法の際には改革に参加したが、政変後、康有為らと政敵となった。1909年に死去。

(57) 劉洋・王潤澤「聯通五洲：清季海外政治報刊『清議報』発行網絡研究（1898-1901）」（『編輯之友』第7号、2023年7月）を参照。

政治的支援の意味が含まれていた。

同年12月に発行された『清議報』第33号、すなわち『采風報』が代理販売所として加わった号以降、発行体制は次第に回復していった⁽⁶⁰⁾。しかし数ヶ月後、おそらく清朝政府による取り締まりが再び厳しくなったため、1900年3月発行の第40号から、『清議報』は清国内の代理販売所が再び減少し、1900年11月発行の第69号では、清国内の代理販売所は5ヶ所にまで減り、そのうち上海には2ヶ所のみとなった。前述したように、『采風報』はこの数少ない代理販売所の一つであり、代理販売所が5ヶ所にまで減少した時でさえ、『清議報』の代理販売を依然として続けていたのである。『清議報』にとってこれらの代理販売所は清国内で得られた貴重な支援であり、采風報館が『清議報』、ひいては保皇会側から信頼を得ることになったのは想像に難くない。

なお、采風報館と横浜保皇会とのつながりはその後も続いた。『清議報』の後継紙である『新民叢報』は、1902年2月の創刊号から采風報館を代理販売所に指定しており、横浜保皇会と采風報館の連携が『清議報』廃刊後も継続していたことが窺える。もちろん1902年当時、呉趺人はすでに『采風報』主筆の職を離れていたと見られるが、在職中はこの強いつながりを背景に主筆として活動していたことになるだろう。

5. 『采風報』と『知新報』の関係

『采風報』と保皇会との関係は、『清議報』との関係だけに止まらない。『采風報』には香港・マカオ保皇会機関紙である『知新報』ともつながりが認められ、『采風報』の記事はたびたび『知新報』にも転載されている。『知新報』が最初に『采風報』の記事を転載したのは、第115号（発行時期は旧暦光緒26年3月1日、西暦1900年3月31日）である。その後、『知新報』第117号（発行時期は旧暦光緒26年4月1日、西暦1900年4月29日）から第126号（発行時期は旧暦光緒26年8月15日、西暦1900年9月8日）まですべての号に『采風報』の記事が転載されている⁽⁶¹⁾。呉趺人が『采風報』に主筆として在職していた期間は1899年の早い時期から1900年夏までであったことから、記事が『知新報』に転載されていた期間と概ね重なっていたことが分かる。前述したように、『采風報』のバックナンバーは現存しているものが非常に少なく、すべてを確認するこ

(58) 近代の学者。1866年、江蘇省淮安県に生まれる。1882年頃より金石学の研究を開始。1896年に『農学报』を創刊。1898年に東文学社を創立。1906年、北京に赴任し、以後清朝政府の教育部門で官職を務める。辛亥革命後、学術研究に従事し、清朝皇帝の復辟に尽力した。九一八事変後、満洲国建設を策謀し、いくつかの要職に就任し、漢奸とされた。1940年に死去。

(59) 劉洋・王潤澤「聯通五洲：清季海外政治報刊『清議報』発行網絡研究（1898-1901）」（『編輯之友』第7号、2023年7月）を参照。

(60) 劉洋・王潤澤「聯通五洲：清季海外政治報刊『清議報』発行網絡研究（1898-1901）」（『編輯之友』第7号、2023年7月）を参照。

(61) その後、『知新報』は『采風報』を転載することなく、第134号（発行時期は光緒26年12月15日、西暦1901年2月3日）をもって廃刊となった。

とはできないが、現存する1900年6月21日付の第559号に掲載された「請匪保護」という記事が、『知新報』第122号（発行時期は旧暦光緒26年6月15日、西暦1900年7月11日）に全文転載されている。転載記事の末尾には「録『采風報』」と明記され、『采風報』の原文のまま内容に変更がないことが確認できた。恐らく他の「録『采風報』」と記載された記事も、そのまま転載されていると考えられる。

転載された記事の内容には特徴が見られ、康有為ら維新派の立場を支持する小品文が目立つ。例えば「見重外人」では、「康有為之為人乃出中国古聖孔子之道、磨練而成、故於天下大勢、燎若觀火、惜乎其未学他国語言文字耳。想其今日之坐言、他日必可起行也（康有為の人となりは、中国古代の聖人である孔子の道によって鍛えられたものである。そのため、天下の大勢を見抜く力は火を見るよりも明らかであった。ただ、彼が外国の言語や文字を学ばなかったのは惜しいことだ。今日の彼の言論も、いずれ必ず実現されるに違いない）」⁽⁶²⁾と、康有為の人となりや見識を称賛し、期待を述べている。戊戌の政変後、康有為の親友や支持者が清朝政府によって厳しく追跡されていた当時の状況を考慮すれば、新聞紙上で公然と康有為を支持することは極めて危険であった。『采風報』はその危険を冒して康有為への支持を表明していたことになる。この記事執筆したのが吳趸人であるとは限らないが、『采風報』の全紙面の内容に責任を負う主筆である以上、吳趸人が康有為支持という政治的立場を選択し、あえてこの文章を掲載したことは間違いないだろう。

別の「剛毅維新」⁽⁶³⁾と題された文章には、吳趸人らしいユーモアと皮肉が色濃く表れている。要約すると、清末の守旧派の政治家である剛毅⁽⁶⁴⁾らが武器の新調について議論していたところ、その話を部下に聞かれ、誤って剛毅らが維新の政治改革を目指しているとの噂が流れ、清末の官僚社会に波紋が巻き起こったというものだ。噂を耳にして驚いた人物が、「不好了、我們中堂講起維新來、將這班維新党人、又要起用了（大変だ、我々の宰相らも維新の話を始めた。これではあの維新党の連中がまた任用されそうだ）」と慌てた様子で言ったと書かれている。清末の官僚たちが、維新派が再び権力を握ることを恐れている様子を皮肉った文章と言える。ユーモラスでありながらも鋭い皮肉を含んだ文体は、吳趸人の特徴的なスタイルに酷似している。署名がないので吳趸人の文章と断言できないものの、政治批判を含む内容の文章を『采風報』に掲載することを、吳趸人は主筆として判断しているはずである。

『知新報』の転載を通して見ると、『采風報』は娯楽ニュースなどを扱う「小報」であったが、

(62) 「見重外人」（『知新報』第119号、1900年5月28日）を参照。

(63) 「剛毅維新」（『知新報』第118号、1900年5月13日）を参照。

(64) 本名はタタラ・ガンイ（他塔拉・剛毅）、清末の官僚。1837年、札幌木で生まれる。1898年の戊戌の政変では、光緒帝を廃位し、新政を中止することを主張し、西太后の信任を得た。1900年には義和団を支持する清朝の高級官僚の一人となる。1900年8月、八カ国連合軍が北京を占領した後、西太后と共に西へ逃亡する途中で死去。

そうした非政治的な紙面の中に、目立たない形で政治的立場を示していたことが窺える。『采風報』は現在ほとんど残っておらず、その全体像を把握するのは困難ではあるが、『知新報』が転載した記事以外にも、維新派の立場に立って書かれた記事が散見される。例えば、呉趼人が在職していた1900年に発行された『采風報』を見ると、前述の記事以外にも、梁啓超が執筆した慈禧太后を批判する『戊戌政変記』の広告⁽⁶⁵⁾が公然と掲載され、康有為の暗殺未遂に関する誤報を訂正する記事⁽⁶⁶⁾も見受けられる。『采風報』は直接的、あるいは間接的にその政治的立場を表明していたと言えるだろう。

他方、『知新報』ひいては保皇会にとって、『采風報』は保皇会の政治的立場を清国内に伝える貴重なメディアとして位置づけられていたことになる。『知新報』はわざわざ「小報」の文章を転載することによって、清国内の支援者が存在することを国内外の読者に向けて可視化しており、転載した文章の内容そのものとは別の意義も認めていたと思われる。

6. おわりに

本稿では、呉趼人が主筆を務めた上海の『采風報』が、保皇会の機関紙である『清議報』や『知新報』との間で協力関係があったことを論証した。

戊戌の政変後、維新派は光緒帝の復権を目指して保皇会を設立、世界各地に拠点を設けて機関紙を刊行し、海外で政治活動を続けた。他方、清国内では外国人が刊行する新聞などが例外的に保皇会と協力関係にあったことを除けば、基本的には清朝政府によって保皇会の活動は厳しく制限され、機関紙の刊行はもちろん、流通や販売もままならない状況であった。

呉趼人が関わっていた『采風報』は娯楽記事を主にしたいいわゆる「小報」であり、政論を掲載する新聞ではなかったが、二つのことから維新派支持の立場を示し続けた。一つは、『清議報』の清国内にある数少ない代理販売所を引き受けていたことである。もう一つは、康有為の称賛や保守派への皮肉を交えた小品文など、政論とは異なる目立たない形ではあるが、維新派寄りの政治的立場を窺わせる原稿を掲載していたことである。本稿では、これらの原稿が『知新報』に頻繁に転載されていたことも確認した。保皇会側が『采風報』を清国内の数少ない味方として認識し、そのメディアネットワークに組み込んでいたこと、すなわち両者が協力関係にあったことを示すものと言えるだろう。また、呉趼人自身が主筆として『采風報』に掲載するすべての記事の責任を負っていた以上、保皇会との協力関係、および保皇会機関紙を通じて張り巡らされたネットワークの中で、主体的に一定の役割を引き受けていたことも間違いないと思われる。

本稿冒頭でも述べた通り、呉趼人と保皇会、および保皇会関係者との直接的な関係を示す確実

(65) 「寄售戊戌政変記」（『采風報』第369号、1899年12月8日）を参照。

(66) 「七誌康有為被捉謠函」（『采風報』第424号、1900年2月6日）を参照。

で、まとまった資料は存在しない。しかし、保皇会側の資料を丹念に見ていくと、呉趺人と保皇会関係者との交流を窺わせる断片的な資料はいくつか存在する。今後は別の資料から呉趺人と保皇会との関係について考察を続けると共に、呉趺人にとって保皇会のメディアネットワークがどのような意味を持っていたのか、および保皇会において呉趺人という一人のジャーナリストはどのような存在であったのか、といった諸問題について考えていきたい。